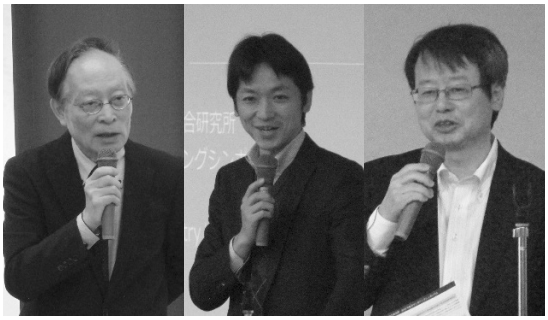
聖学院大学総合研究所　カウンセリング研究会主催
2018年度　カウンセリングシンポジウム「壁を越える本」
シンポジスト：堀　肇・松谷　信司



左：堀肇先生　　中：松谷信司氏　　右：藤掛明先生（司会）

去る2018年11月30日（金）、2017年度カウンセリング研究会主催のカウンセリングシンポジウムが聖学院大学ヴェリタス館教授会室にて開催された。「壁を越える本」というテーマのもと、牧師（鶴瀬恵みキリスト教会）でご自身多くの著書を持つ堀肇先生と、キリスト新聞社代表取締役社長（『キリスト新聞』・『Ministry』編集長）の松谷信司氏の両名をシンポジストに迎えて行われた。

私たちは普段、世代や価値観、信仰などの様々なものに属している中で、物事を考え、語り合い、本も読んでいるが、時としてそうしたものが壁となることがあるかもしれない。これをふまえ、「壁を乗り越える本」という視点で新しい本の旅に出たいという願いをもって企画されたのが、今回のシンポジウムである。

当日はまず、聖学院大学総合研究所カウンセリング研究・研究代表で、同大学及び同大学院教授の藤掛明先生の司会により開会の挨拶が行われた。

次の講演発表では、シンポジストに「壁を越える本」として、3冊の本を紹介して頂くことになっており、最初の堀先生は多くの人々の共感を呼び、見聞きしたことのある参加者も多かった本を選ばれた。そして、著者自身が歩んだ道のり、その著書の特徴ならびに印象的な本文の言葉を丁寧に取り上げていかれた。

まず1冊目は『人間になる』（ジャン・バニエ著、新教出版社、2005）。バニエは、知的障害のある人たちとの生活を通じて、始めは彼らのところまで降りていけないと壁を感じるが、次第に、自分とは異なる他人に自分の心を開けるようになり、心を通わせて生きる喜びを分かち合うことにより「共通の人間性」を見出したと話された。そして、人間理解は「霊性の扉を開く試み」であり、信仰生活の理解のための人間理解の重要性を彼が説いていたとも指摘した。

次は『それでも人生にイエスと言う』（V.E.フランクル著、春秋社、1993）。人生を意味あるものにするために、「人生に何を期待できるか」ではなく「人生は私に何を期待しているか」を問うというコペルニクス的転換が必要であり、私たちは問う存在ではなく、問われる存在なのだというフランクルの指摘は、人生だけでなく信仰生活にも反省を迫るものではないかという問いをフロアに投げかけた。

3冊目は『置かれた場所で咲きなさい』（渡辺和子著、幻冬舎、2012）。著者について、自身の人生の物語が他者を説得できるものであり、エッセイに見られる人間性と信仰が違和感なく混然一体となって調和していると評した。また、苦しみや悩みを受容的共感的に受け止めながらも、問題に直面化・行動化させている背後にカトリック信仰の修道性の存在を見出し、それが日本人のメンタリティと調和しているが故に人々の共感を呼ぶのではないかと分析した。

これら3冊の本は、どれも自分自身の存在が作り出している「壁」を越える本といっても過言ではないと思われた。

続く松谷氏による講演発表では、「超えるべき壁」として3つの壁を提示し、それぞれの壁を説明可能とする、比較的最近出版され、しかも斬新とも言える本が紹介された。

1冊目は、「異なる信仰」の壁の中で著された『聖（セイント）♥尼（あま）さん――「クリスチャン」と「僧職女子」が結婚したら。』（露の団姫著、春秋社、2017）。一

般的には同じ信仰者同士の結婚を勧めることが多いキリスト教界だが、現実的には未信者と結婚する信者は増加している。著者夫婦の背景は特徴的であるかもしれないが、互いに寄り添っていく姿には、宗教に限らず、異なる価値観を持つすべての夫婦に役立つ知恵が満載であると語られた。

２冊目は、「同調圧力」が築く壁がもたらしたともいえる親子の価値観の違いについて書かれた『クラスでケータイ持ってないの僕だけなんだけど』（高橋章子著、朝日新聞出版、2010）。価値観の違いに目をつぶるのではなく、違いと対峙し、持論を展開する母の姿とその息子とのやり取りに注目し、松谷氏は、併せてご自身のライフヒストリーについても語られたのだが、参加者にとっては、新たな一冊の本を読んでいるような感覚に陥ったのではないかとも思われた。

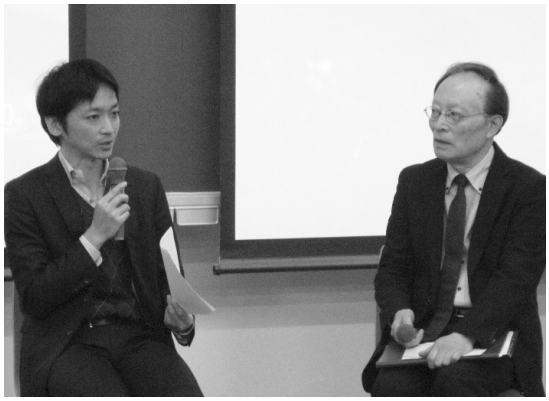
３冊目は、「美しき理想化」の壁を越えるヒントが提示されている『信じてたって悩んじゃう［合本･愛蔵版］』（みなみななみ著、いのちのことば社、2010［1996 ～ 1997年出版の３冊の合本］）。理想に囚われて自分を取り繕うのではなく、思考と悩むことの重要性に気づきを与える本であり、読者を自分なりに考え、答えを見つけ出していく方向に導く本として高く評価した。

また、キリスト教メディアの視点から、教会の中にいる人が作り、尚且つ自覚できていない「壁」の存在や、いわば教会の壁の外にいる「信じる」つもりはないが「知りたい」層に対する配慮の重要性についての示唆もあり、さらには、「信じてもらうためではなく、まず知ってもらう」という相手に歩み寄る提案がなされた。

両氏の講演発表後は、休憩時間に質問用紙で寄せられた質問にシンポジストが答えていく形で質疑応答の時となった。講演の内容が深掘りされると共に、両シンポジストの問題意識や考えが表現される場ともなり、参加者も身を乗り出すかのようにして聞き入っていた。

最後に、司会の藤掛先生は、「壁のこちら側もあちら側も、自分の正当を信じている。それを乗り越えて多様な生き方に触れるとき豊かな収穫を手にするのではないか」と述べられた。

今回は、もっと多くの方々とも時を共にしたかったものの、講演と質疑応答の両方によって、シンポジストと参加者との対話、さらには参加者自身の内面における自己との対話が生まれているかのような広がりと熱気をもつものとなり、名残惜しさを覚えつつの閉会となった。



質疑の様子　左：松谷信司氏　右：堀肇先生

（報告者：花野井百合子［はなのい・ゆりこ］カウンセリング研究センター心理相談スタッフ）

本　書籍のご案内

お近くの書店、Amazon.co.jpからお買い求めいただけます。

ヘンリ・ナウエンに学ぶ
——共苦と希望

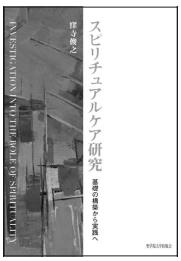
平山正実、堀 肇 編著
2018年2月1日（3刷）
2,000円（税別）

人々の孤独を理解し、
共苦から希望へと導く
ナウエンのアプローチを学ぶ。

スピリチュアルケア研究
——基礎の構築から実践へ

窪寺俊之 著
2017年11月20日
4,800円（税別）

臨床現場で直面する課題に
解答を見つけ出そうとする試みが
まとめられた1冊。



聖学院大学出版会　TEL:048-725-9801　FAX:048-725-0324
URL:https://www.seigpress.jp/